

〔翻訳〕

ヘンデルのオラトリオと18世紀思想（その13）

ルース・スミス 著

赤井 勝哉[†] 訳

第7章 オラトリオに向けて

「ここにおいて気晴らしは、信心へとつながっている」

——『ポスト・エンジェル』1701/2年3月

18世紀の前半の音楽界において、最良の芸術は宗教を教えるものであるという考えは、文学界におけるのと同様、あるいはそれ以上に揺るぎなく確立していた。第3章で見たとおり、音楽とは感情と精神に対して抗し難い力を持っており、それゆえに恐ろしい悪影響をももたらしうるものと考えられていたが、道徳的あるいは宗教的な教訓と手を携えたならば、世のため人のための素晴らしい力となるものなのであった。《イングランドのアムピーオン》へのジョン・ブロウの序文が参考になろう。この序文は（非常に）世俗的な歌曲集に付されたものであるが、音楽の宗教的起源を強調し、音楽が持つ啓蒙し、改善し、「そしてとりわけ、信心深い敬虔な人々の心を燃え立たせる」能力について力説している。詩篇に曲を付けたもの以外を俗人が歌うことに対して疑念の目を向けるプロテスタントの伝統にまだ縛られていたブロウは、単なる社交的な音楽について弁明調の意見を述べているのであるが、序文を結ぶにあたっては、この作品集に続けて間もなく「比較にならぬほど優れたもの、つまり礼拝用の神聖な楽曲集」を出すことを請け合っている。オックスフォード伯爵であったロバートとエドワードのハーリー

[†] AKAI, Peter Katsuya 四国学院大学文学部教授

親子に司書として仕えたハンフリー・ウォンリーの以下の見解は、より教化力を持つゆえに宗教曲は世俗曲に優るという考えが公平な目利きたちのあいだに見られたことの証左である。

若者ならばより良いメヌエットやダンス曲を作るかもしれない。だが、年長者はより然るべき典礼用の聖歌すなわちアンセムを作るであろう。前者の音楽は（その他の特技と相俟って）、愚かな少女をそそのかして恋をさせるには大いに役立つであろう。しかし後者の音楽は、永遠に生き給う方^{みな}の御名の榮譽と栄光を讃えて喜び歌う真に宗教的な人々の、信仰心⁽³⁾を掻き立て、心を衝き動かし、情熱を燃え上がらせるのである。

マシュー・プライアーの「リュートを奏でるエクセター伯爵夫人に対する」以下の賞讃は、使い古された考え方を優雅に利用している。それはすなわち、崇高な音楽は世俗的文脈で使われた場合でさえ地上において天国の味を前もって経験させ、罪人たちを贖いうという考え方である。

生れ故郷の天国へあなたが帰り、
あなたの存在によってそこにある数々の祝福に華を添えるとき、
あなたのリュートが弦をより高く鳴らす必要はほとんどない——
その調べをかの永遠の聖歌隊に合わせるために。
地上^{ここ}において、あなたの技は完璧。あなたの調べは
我らの書物よりも多くを為し、卑しい無神論者に知らしめる——
下界⁽⁴⁾で彼が耳にするものによって——天国があることを。

先に見たように、イングランド教会の聖職者たちは、感情を激しく揺さぶり霊的な高揚感を与える宗教音楽の作曲を奨励していた。彼らは典礼音楽を推奨することだけにとどまらなかった。アーサー・ベッドフォードは『神聖な音楽の卓越性について』という説教において、日曜日の夕刻に家庭で詩篇を歌うようにと力説し、この説教を出版した際には附録として「神聖な音楽を奨励し教会区^{パリッシュ}の蔵書のための寄付の推進を図る提案」を添えている。これはロンドンにあった複数の

宗教的な愛好家団体の構成員による提案であった。月ごとの讃美歌シートを刷って売り出そうというもので、民間歌謡と同じ要領で安価な1枚の用紙に3、4曲を掲載し、これによって生じた利益はすべて、特に困窮する教会区に蔵書を備え付けるため、あるいはその内容を充実させるために回されることになっていた。ベッドフォードは30頁にわたる「附録——神聖な音楽のための聖歌の実例」の中で、歌詞と音楽の両方に対する提言を行っており、祝歌^{キャロル}2曲、チャンピオンによる聖歌⁽⁵⁾2曲および自作の3曲を収録している。

音楽は信仰心を鼓舞しようという信念、またそうであるからこそ我々は宗教音楽を作りこれに参画する義務があるという確信の双方について、ほかに多くの具体例を挙げることは可能である。このような考え方を要約したもので最も有名なのは、アディソンによるものである。以下に長々と引用するが、それだけの価値はあろう。ヘンデルのオラトリオの先触れを為すものとして私がここまでに明らかにしてきた様々な思想の、ほぼすべての要約にもなっているからである（強調は著者による）。

このところ舞台上の音楽に対して注がれているのと同程度に情熱と努力が、我々の教会の音楽を育て発展させるために注がれてほしいものと、私は衷心から願うものである。このことに対して、我々の音楽家たちには1つの大きな刺激となることがある。彼らは素晴らしい言葉と、そしてまた、素晴らしく多様な言葉と、必ず出会うことになるということである。靈感を受けて著されたかの書物の諸部分において見事に表現されていない情動などないのであって、それらは聖なる歌やアンセムの歌詞に相応しいからである。……

我々はそれゆえに、それ自体がかくも美しく、また音楽の調べに乗せるのかくも相応しい、このような言葉の財宝を有しているのであるから、卓越した人々がその種の音楽にほとんど注目せず、これを奨励しようとしなかったことを不思議に思わずにはいられない。その種の音楽は、理性に基盤を置くものとなり、我々の喜びを増してくれるに比例して我々の美德を磨いてくれるものであらうに。普通の作品によって掻き立てられる情動は、大抵、真剣に念慮するのは恥ずべきことと思われるような

愚かしく馬鹿馬鹿しい出来事から生れ出るものである。しかし、聖歌やアンセムによって喚起される恐怖や愛や悲しみや憤怒の念は、心をより良くするのであって、全くもって道理に適い賞讃に値する動機から発するものである。楽しみと務めとは手を携え、満足が大きければ大きいほど、我々の宗教心も大きくなる。

選民と呼ばれている人々のあいだでの音楽は、宗教的な芸術であった。シオンの歌は、東方の王宮のあいだで高く評価されていたと我々が信ずるに足る根拠を持つものであるが、これらは詩篇、および至高の存在を讃え寿ぐ詩歌にほかならなかった。この聖なる民における最大の征服者[ダビデ]は、古代ギリシャの抒情詩の風習に従って、彼の聖なる頌歌を作詞しただけでなく、通例、自ら曲付けも行なった。その後、彼の作品は聖なる幕屋に献げられもしたが、民の信仰のためのものであると同時に、民族的な娯楽ともなったのである。

演劇というものの最初期の原型は、1曲の合唱だけから成る宗教的な礼拝だったのであり、その合唱とは神に献げる聖歌にほかならなかった。快楽志向と享楽性が清浄性と宗教とを凌駕するようになるにつれ、この礼拝形式は退化して悲劇へと変貌を遂げてしまったが、それでも、悲劇においても合唱はまだその第1の役割を忘れはしなかった。つまり、不道德なあらゆるものに烙印を押し、賞讃すべきあらゆるものを推奨した。無垢の者たちのために天に執り成しを行い、罪人に天罰が下るようにと嘆願したのである。

ホメロスとヘシオドスは、詩神たちがユピテルを取り巻いてその玉座の周りで讃美の歌を高らかに歌う様子の描写によって、いかにしてこの芸術を応用するかを我々に示してくれている。私は古代の作家たちの無数の文言から、声楽および器楽曲が宗教的礼拝において用いられたことのみならず、彼らが最も好んだ気晴らしにはそれぞれの神に対する歌や讃歌が満ちていたことを示すこともできるだろう。我々が身近にこの種の娯楽をいくつも持っていたとしても、それらは我々の情感を少なからず浄化し高揚させてくれ、我々の思考に新鮮な刺激を与え、魂における神聖な衝動を育んでくれることであろう。官能的で節度のない快楽によつ

てそれを掻き消すことのなかった者ならば誰でもが感じる魂の衝動である。

音楽は、このように応用されたならば、聴く者の精神に気高い思いを湧き起こし、立派な考えで満たしてくれるのである。信仰心を強め、讚美を恍惚にまでしてくれる。礼拝のあらゆる動きを引き延ばして、普通の宗教的礼拝方式において発せられる束の間の言語表現に伴う印象よりも、持続的で恒久的な印象を心に刻んでくれるのである。⁽⁷⁾

『スペクテイター』誌上において通例そうであるように、アディソンが当時流布していた様々な考えを格調高くまとめ上げているだけであることは、これまでの諸章において提示してきた論証から明らかであろう。ここにおいて彼が独創的なのは、初めてそれらの考えを全て包括し、総合的に概観している点にある。教会音楽を練磨する必要性、感情表現のための豊かな資源としての聖書、古代ユダヤ教の礼拝における音楽の使用、世俗的文脈での宗教音楽利用の古代における先例、ダビデの詩篇の国家的・宗教的目的、感動を呼び起こす宗教的な歌曲が持つ教化力、演劇およびギリシャ悲劇の合唱の宗教的起源、合唱に具わった教訓主義的傾向、魂のための娯楽的音楽の必要性——これらはいずれも、よく知られた論題である。ところが、このように一まとめにされてみると、ヘンデルのオラトリオの規範について、驚くほど予言的に提示するものとなっているのである。

しかし実は、アディソンがこれらの論題を一まとめにしたことも、彼の独創ではなかった。ヘンデルのオラトリオを構成する素材の多くは、宗教的娯楽の中にその先駆けが見られたのであり、そのことをアディソン自身も気がついていたはずだからである。上で概説してきた批評的状況を背景にして、キャヴェンデッシュ・ウィードンが月毎に制作した音楽と詩を合わせた作品は、最近までは無視されるか、あるいは下手物として軽視されてきたが、しかし実は、文学改良者たちの目論見と教会音楽の作曲家たちの手腕とを結びつける試みがあったとしたならば、これらこそまさに、当時育ちつつあった様々な考えの苗床の中から花咲くことが期待されていたかもしれない作品群のように思われる。実際、この作品群は1702年に制作されたのであり、文学に関して唱えられた提言の最初期のものにはこれと時期が重なっているものがある。オラトリオの先駆けを為すものとして、また当時の社会的・芸術的な理想を見事に表現したものとして、ここでこの作品群に

着目してみる価値はあろう。⁽⁸⁾

ウィードンはリンカンズ・インの法律家であったが、そこでの彼の体制教会への献身ぶりは、聖歌隊を用いた礼拝の改良計画およびその礼拝を行うための新礼拝堂をレンの設計により建設するという計画に、明白に顕れている。⁽⁹⁾ウィードンの「聖なる音楽の催し」は、1701/2年の1月から5月にかけて行われたようである。現存する最初期の広告は、1月6日の第1回の開催を知らせるもので、最後は5月中旬のものである。会場は、当初は聖ブライド教会（聖セシリア祝祭の期間に説教が行われる場所）のはずであったが、第1回の直前にステイショナーズ・ホール（聖セシリア祝祭の音楽の部の開催場所）⁽¹¹⁾に変更となっている。ウィードンの企図は、リンカンズ・インに関する計画と比べても引けをとらぬほど野心的で、各月の第1週に2回の公演を行い、毎回「聖職にある人々、あるいは大学の紳士たち」、つまり熟練の演説家たちが語る「演説」と詩——彼は観衆に投稿を呼びかけている——および2曲のアンセムによって構成するというものであった。これらはすべて、公演の主題を説明することになっていた。その主題とは、最初の月では、火曜日には「神への讃美、神の強大さの表明」であり、土曜日には「人や党派に拘りなく、あらゆる種類の不敬、悪徳、不道德に抗って」であった。⁽¹²⁾ウィードンが公言していた目標は3つあった。すなわち、宗教的覚醒を通じて道徳心を改善すること、音楽を下賤な応用から救い出して宗教的・道徳的目的のためのものに直すこと、そして慈善事業の3つである——

（大多数の人々の耳と心とをかくも魅了する）音楽を、元来の高貴さへと引き戻し、我々の偉大なる創造主であり、あらゆる調和の創始者かつ源泉であられる方を讃美するという、最重要な目的へと連れ戻して、年始およびそれに続く月々を神への讃美の祝典で始める試み・・・信心と道徳心とをより好ましく奨励し、悪徳を挫くために・・・凋落した紳士階級の救済、子供たちに宗教、音楽、計算を教える学校の維持のため⁽¹³⁾に。

慈善のための宗教的な音楽というのは、ヘンデル研究者に馴染み深い考え方である。《メサイア》が英国人の意識の中に確固たる地位を獲得したのは、定期的な

慈善演奏会を通じてであった（ダブリンにおける初演は3つの慈善事業を支援して開催されたし、捨子養育院における毎年開催の演奏会は1750年に始まっている）。相応しい類の後援を誘致するためにウィードンが観衆に確約したことがあった。それは、「そのような催しにおいては大きな不都合となる〔ダブリンにおけるヘンデルのオラトリオ慈善演奏会の運営者たちが遭遇することになる〕超満員の状態を避けるため、相応しい会場が用意されるであろうし、貴族の方々専用の場所も確保されるであろう」というものであった。⁽¹⁴⁾

推薦の辞が付け加えられて上演のあとで出版された、現存する歌詞冊子のような印刷物3冊が示すところによると、ウィードンは催し物の中身——アンセムとアンセムのあいだに複数の詩と1題の演説（彼はこれが「15分の話」より長くなるべきではないと取り決めていた）を挟み込むという内容——についての自らの計画を実行に移したようである。作曲者はターナー（コントラテノールとバスと合唱のための詩篇19、コントラテノールとテノールと合唱のための詩篇21）およびブロウ（独唱と合唱および合奏のための詩篇96、詩篇84を用いたアン女王の戴冠式アンセム、およびテ・デウム）であった。語りによって貢献したのも、作曲者と同様に「お歴々」の人々で、宗教の大義に関心を持つ者ばかりであった——改革主義的な宣誓拒否者のジェレミー・コリア、桂冠詩人のネイハム・テイト、その仲間で詩篇に基づく詩を書いたニコラス・ブラディ、のちにリッチフィールドの大聖堂参事会員となるエドワード・ウェルチマンである。彼らの作品はウィードンの指示に忠実に従ったもので、全世界の創造主として神を寿ぎ（コリアはニュートン理論による、ボイル講義を短くしたような説教を行なっている）、「音楽という斯くも神聖なる賜物が、これ以上、放蕩息子のように本当の親のもとから離れて放浪し、つまらぬ物事を飾る添え物となることなく、その本来の地位を回復して、その守護者たる神の庇護の下に入ることができるよう」と力説している。

これはテイトによる「ウィードン氏の第1回宗教的音楽の催しのための詩」の主題であった。この詩は（投稿を呼びかける広告においては60行までと規定されていたのだが）92行から成る五歩格二行連句の詩であった。語り手は「音楽」からの「嘆きの使者」であり、「音楽」自身が罪を悔いる放蕩者ということになっている。彼女は、

(天上の生れで)

最初は神聖な歓楽のために聖別されたのであって、
祭壇での奉仕に限って用いられており、
頌歌とハレルヤとが鳴り響いていた……
かの時には、敬虔が調和を呼び起こし、
そして調和が敬虔の炎を高貴なものとしていた。

ところが彼女は彷徨を始めてしまう。最初に行ったのは純朴な田園地帯であった
（「身を持ち崩したわけではないが、解放たれた欲望へと」）。次に向かったのは
宮廷で、そこでは初めは厚遇されたが間もなく顧みられなくなる。そしてついに
雇われの身となって彼女が向かったのは、

小夜曲、仮面劇、宴席、浮かれ騒ぎの酒宴、
道化芝居、茶番劇、かの舞台上での魔術、
そして、下品な時代のおぞましき憂さ晴らし。

であった。愚かしい歌詞に曲付けされて辟易した「音楽」は「都会を捨て」、今
では惨めなマグダラのマリアの如くになり果てている。この時点において観客は、
彼女の哀愁の調べを聞かされることとなり、ト書には「ここで休止。哀れをそそ
る器楽曲が、遠くのほうで奏でられるかのように、静かに、かすかに、演奏され
る」とある。語り手は告げる——「豊かな旋律を湛えるこの溜息は、天使の合唱
隊をも魅惑して消沈させる」と。そしてこの天使たちが「音楽」が再び天上へ入
ることを許し、今や彼女はそこから降って聴衆に天上の聖なる喜びがどのような
ものであるかを伝えるのである。

彼女は到来する……。さあ大地よ、彼女の祝福された讃美の歌を聴け——
天を汝へと引き下ろし、汝を天へと引き上げる歌の数々を。

このあとにはターナーが詩篇19に曲を付けたものが続いた。広範囲にわたる道徳
的な目的を取り揃えたことに加えて、ウィードンは芸術的実験を行っていた。

神聖な音楽、説明的な音楽、詩、説教および議論を世俗的な会場での公演の中にただ単に寄せ集めただけでなく、それらを結合させたのである。ウィードンは、演技を伴わない音楽劇を創り出す途上にあったことになる。

1月31日の催しには、イングランドの音楽劇にはお馴染みの要素がもう1つ含まれていた。政治問題である。「上院の聖職者議員および世俗議員の諸卿、および名誉ある下院議員の方々にお楽しみいただくための」特別上演はテイトによる2篇の詩のうちの2番目において「この燦然たる星の如き人々の群れ」のことを「星座——その運行の影響にかかっている / 「スペイン継承戦争で」苦悩するヨーロッパの命運が」と呼びかけている。我々がオラトリオの中に見出すことになる類の国家主義を先取りしてテイトは、「英国の諸卿ならびに愛国者たち」を励まして「無法なフランス人の力による攻撃を / あらゆるものを呑み込んでしまいそうな強欲な竜を」撃退させ、ヨーロッパの救済者にならしめるものとして音楽を描いている。

そして、見るがよい。いかに早く、あなた方の温和な容貌によって
暗闇の絶望から、再び希望にあふれる夜明けへと引き戻され、
この世の暗黒の風景が一変するかを力を、失う危機に瀕しながらも
新鮮な勇気が芽吹くかを、あの恐怖の竜が後退することになるかを！

テイトは続けて、またしてもヘンデルのオラトリオに先駆けて、次のように述べる。「音楽」は自らの英雄的過去において体现されたような英国の英雄的能力を讃美するために喜んで身を献げるであろう、と。「英国の誉れ」は「圧制者たちを卑しめ、人類を救済する」能力にあると「音楽」は明言するのである。「つまりその能力とは」——と、ルネサンス期に無数に発せられた音楽の賞揚の声を反響させつつ、またヘンデルによる1739年版の聖セシリア頌歌およびいくつものオラトリオの合唱の主題を先取りして、テイトはさらに言い及ぶ——

自然の本質であり、その本質とは調和であって、
我らが歌の素晴らしき主題たらんものである。
幼子であった「物質」は暗闇に包まれて眠っていた。

すると突然、形無き渾沌が秩序へと変異した。

そしてそれから、より崇高な栄光をもって驚愕させるべく、
より高き世界へと聳え立つような歌が昇りたち、
星々のあいだを駆け廻り、汝らの恍惚とした耳へと、
回転する天空の音楽を降り来らせる。

しかるに我々の調和はさらに高みへと立ち昇り、
さらに崇高なる音楽をもってかくの如き来客たちをもてなし、
自然界を越えて、天上界の歌々へと舞い上がり、
偉大なる創造主の讃美をもって汝らを魅了せずにはおかぬ。
天使たちもこの間、このように神聖な演奏を
誇らしげに支え、この演奏会に参加する。

ああ、聖なる讃美よ！ 汝は何と定義なされるべきか。
高揚した精神の最も気高き役割……

現存する5月用の冊子では愛国主義的な主題が続けられているのであるが、英語の歌詞の付いた音楽作品を推進する運動家たちの著述によく見られる、自国の芸術に対する思いを示す表現でもってそれがなされている。序文として付された、ウィードンの趣旨に賛同する支援者からの「カヴェンディッシュ・ウィードンへの手紙」は、以下のように言明している——「あなたの催し物の制作・上演は、我々が世界中のどこにも劣らず有能な音楽家たちを有していることの証明となっていますが、この励みとなる賞讃の言葉を、我らが同胞の芸術家たちは欲することでしょう。現時点では、あまりに惜しげもなく外国人に与えられている讃辞ですが」。この手紙の主が抱く、国家的な芸術改革のみならず道德改革が緊急に必要であるという意識は、続くエドワード・ウェルチマンによるウィードンへの4連詩によって共鳴を受けている。この詩はウィードンをイスラエルの民を解放したモーセに擬えたものである。

ファラオの圧制下に

選ばれた民イスラエルは置かれていた——
惨めな奴隷の境遇に苦しみながら。

泥と粘土にまみれ、煙の立ち込める炉の中で苦役^{はたら}いていた。
しかしこの同じ民は、ひとたび解き放たれ——
神の如きモーセの力強い手によって——
エジプトから、束縛から、導き出されるや、
神の聖櫃を作り、約束の土地を得た。

いかに長きにわたって、嗚呼、神聖な音楽の技が、
エジプトにおける束縛よりも酷い状態に置かれてきたことか！
彼女は色と酒の世界に落とされて、
あらゆる罪の汚れにまみれてしまった。
しかし、あなたこそ彼女を救う者、
あなたは、彼女をその囚われの身から導き出し、
そして我々は、あなたの配慮宜しきを得て、
今や（肉の鍋は置き去りにし）マナを給されたのである。……

さてこそ、音楽と信仰心とが一体となったからには、
カナンへの道は心地よき道であり、
我々は聖なる歌を携えて旅を進める——
神聖な喜悦に酔いしれながら。
もはや我々は通ることはない——
乾いた不毛の荒野を。
そうではなく、乳と蜂蜜が流れる土地を通るのだ。
上なる天国への道は、地なる天国を通して続くのである。

ここにもまた、ヘンデルのオラトリオに先んじている点がある。それは、この場合《エジプトのイスラエル人》が該当するのであるが、ただ単に出エジプトの物語を利用しているだけでなく、その物語を^{アレゴリカル}寓意的に用いているという点である。テイトによる締め括りの詩「美徳を讃美して」はこの引喩を続けており、雲の柱、火の柱、マナが降り注いだこと、岩から水が噴き出たことへの言及を行なっている。打ちひしがれた同胞英国人のためのウィードンによる冒険的試みを、モーセ

がイスラエルの民のために成し遂げた道徳的・霊的救済にウェルチマンが喩えたことについて、テイトはこれを是認しているわけである。

ウィードンの観客たちの反応は、同様の考え方を持った人々が存在していたことの証拠であり、また、我々がほかで見てきたような、このような催し物の主義主張とその影響力とによって強烈に感化されることになる下地があったことを証明するものである。1701/2年3月の『ポスト・エンジェル』紙は「新しいアテネのメルクリウスを含むものであり、才気に富む男女から示された最も素晴らしく興味深い質問に思いをめぐらして」いたのだが、「ウィードン氏は、自分の音楽の催しについてどのような方法を採用ののだろうか。また、彼の上演はどれほどの愉悦を聴衆に提供してくれるのだろうか」と問われたときに、以下のように答えている。

今や我々は経験によって確信している（と、さる巧みな批評家がこの取り組みについて語っている）のであるが、宗教的な作品においてほど音楽がその魅力を最高に発揮することはなく、（ほぼ）いかなる衣装を着ても似合うとはいえ、天使のごとく素晴らしいのは讃美歌と頌歌という衣装を身に付けたときだけである。かかるがゆえに、その気高い力を音楽の原初的で神聖な目的のために再び用いさせようとするこのウィードン氏による企画は、楽の音あるいは敬神を愛するあらゆる人々に受容せられるべきものであるに違いない。さらに、精巧な演説と詩歌が加わっているために我々は（大いに）劇場の楽しみを味わうし、また、それらが神や道徳に関わる主題を持っていることにより、説教壇からの教えをも得ることになる。若者たち、特に高貴な身分の方々や紳士階級の人々は、娯楽を得なければならないし、実際に得られることであろう。もしこれに遥かに劣る娯楽が若者に提供されたならば、彼らは不道徳で破壊的な娯楽に走ることになろう。したがって、宗教的な音楽と演説と詩歌からなるこの催し以上に有益な催しを考案することなど不可能ではないだろうか。

この書き手はエルフィンの主教がのちに《メサイア》に関連して唱えることとなっ

た主張（本書34-5頁〔訳注1〕を参照）を行なっている。すなわち、有閑階級の子らは気晴らしの趣味を欲するものであるが、興味を引くものが与えられなければ不道徳な趣味を追い求めるであろう、というのである。（また、のちにトーマス・ブリアトンが《エステル》台本を翻訳してその序文の中で行うことになるのだが、現存する5月の催しのための冊子の序となっている「カヴェンディッシュ・ウィードンへの手紙」もハーバートの詩「教会の柱廊」から、「説教からは逃げ出す者をも、一篇の詩は捉え / 歓びをして献げものへと変容せしめうる」を引用している。）「我々は（大いに）劇場の楽しみを味わうし……説教壇からの……」という表現は、この催しが文学改良者たちの主要な目標の一部を実現したものであることを示している。また、のちにオラトリオが聖句を歌詞とした教会音楽様式と、（舞台上の演技は伴わないものの）演劇的な要素とを結合させることになるが、この催しとその先駆けであったことも物語っている。第1回の催しにおける演説は「我々が心を歌声と一致させたならば、より永続的な歓喜を微かに前もって味わうことを可能にしてくれるかもしれない」と希望を述べており、神崇拜の「最も崇高で最も神聖な行い」は「我々の創造主への讃美」を歌うことであるという主張によって、オラトリオの合唱を先取りしている。『ポスト・エンジェル』紙によれば、観客はウィードンとその仲間たちの期待に優るとも劣らぬほど熱烈に、「我を忘れ」て、宗教音楽が持つこの「天使的な」魅力に対して反応しており、同紙は、制作責任者に対して「雑草^{ウィードン}抜きを続けて、あらゆる悪徳の根を引き抜いて」くれるように強く迫る以下の詩をもってその報告記事を締め括っている。

あなたの聖なる頌歌、敬虔なる讃美歌と詩篇は
 霊的な熱意へと掻き立てる。肉欲の炎へとではない——
 かの節度なき時代のふしだらな詠唱のように。
 それらはさらにふしだらな韻律の歌詞に曲がつけられていた。
 ボックス席やピット席から成る空しい場所——
 フィリス
 田舎娘が歌と洒落とで言い寄られるあの場所——に対して、
 さあ、別れを告げよう。そしてあなたの演奏会の席に着こう。
 美と愛と機知とによって魅了されるのは終わりにしよう。
 そうではなく、これらの賜物の造り主をこそ崇めよう。

ここにおいて気晴らしは信心へとつながっている。

1つの甘やかな行事において、両者は結合するのである。

神聖な音楽が、その調和をもって

天来の妙なる愛と慈悲へと駆り立てる音楽が……

ここまでウィードンによる催しについて長々と（と言っても、全てを網羅できたわけではないが）述べてきたのには理由がある。この催しの冊子が稀少であり、しかも他においては紹介されていないからである。また、この催しがデニスによってなされた崇高な宗教芸術創出の提案を実現した初期の注目すべき事例だからである。そして、前章以前において論述した多くの事例と同様、ヘンデルのオラトリオの諸要素を先取りしたものであったからである。しかし、以上の点に関してこの催しだけが唯一の存在であったわけではない。この催しは、民衆を楽しませると同時に教導するために歌詞の付いた音楽作品を用いることをめぐる伝統的な考えの一環であって、この考えは優に前世紀にまで遡ることができるものである。1650年代、ダヴェナントは仮面劇^{マ・ス・ク}を一部の特権階級だけのものではなくして、これを教導を主目的とした総合芸術に作り変えて、その過程を通じて芸術と民衆との両方を矯正しようと企てた。前章以前で論述した芸術改良者たちの考えの多くは、またオラトリオの諸要素の多くは、ダヴェナントが複合的表現形態による新形式の見せ物を提案した『ゴンディバート序文』、『道徳心を促進するための提案』、『初日の出し物』の中に既に見られるのである。これは政府主導で行われるべきはずのもので、法に従う民衆を確実に育成することをその主要目的としていた。ダヴェナントは音楽劇を、人間の情動に大きな影響力を持つので国家の統制下におくべきものと捉えていた点において18世紀の教会人、道徳主義者、政治家たちと考え方が同じであり、デニスやヒルと同様、彼もまた音楽劇が国家にとって有益たりうるものと見ていたのである。のちにヘンデルのオラトリオがそうすることになるように、ダヴェナントが計画した制作は近年の国家の歴史を高尚な、英雄詩形式の、叙事詩的な表現によって取り扱い、道徳的行動と市民の美德を教え、道徳的教訓を効果的に補強するために合唱⁽¹⁶⁾を用いようとするものであった。

オラトリオと同様、ウィードンの催し^{ジャンル}も類型の境界を無視し、イングランドの同時代人たちによって標準的であると考えられていた開催場所に関する約束事を

拒んでいる。このことは、「18世紀初頭のロンドンにおいて信心と娯楽との境界線がいかに漠然としたものであったか」を物語っており、また、最初に両者の境界線を曖昧にし、それにもかかわらず——あるいは、それだからこそ、と言えるかもしれないが——民衆に受け容れられたのはオラトリオだったわけでないことを、我々に教えてくれる。実際のところ、オラトリオそのものはこの点において独創的ではなかった。宗教的な音楽は公共あるいは半公共の演奏会場（ヘンデルも馴染みの深かった場所を挙げれば、トーマス・ブリトンの店）、また居酒屋（タヴァーン）に場所を借りて催された音楽クラブの集まり（ロンドンにおいて《エステル》が最初に発表されたのがこの状況であった）において、普通に演奏される出し物であった。⁽¹⁷⁾ウィードンの思想は、彼の死後も受け継がれてゆく。1728年、デフォーは、「立派で礼儀正しい聴衆に相応しい宗教的な詩と演説」が附随した、適度に真面目な音楽の「催し」を定期的に日曜日に開催する制度を作るよう強く主張している——「実際、我々には」彼らを「飲酒、賭博、あるいは下劣な親交」から遠ざけるべく「より良質な類の娯楽を確立しようとするこのような天晴れな取り組みが不足しているように思える」と。ブライアン・トロウエルが指摘しているように、デフォーは1704年11月11日の『レビュー』紙において肯定的に「ウィードン氏による聖なる演奏会」に言及していた。死の翌年に出版されたヘンデルの最初の伝記からは、以下のことが窺い知れる。すなわち、彼の生前は聖書を素材とした作品を娯楽の場で上演することは、「自ずと対立関係にあると考えられるのが普通であった教会と劇場とに、ある種の連携をさせてしまう」点において「危険な新機軸に見えた」のであって、現時点（1760年）の啓蒙化された寛容な空気はそのことを許容するけれども、「偏狭な考え方が主流であった」古い時代の人々はオラトリオを是認することはなかったであろう、と。⁽¹⁸⁾これらの事実が示しているのは、ヘンデルが劇場ではなくて音楽会場で上演していたならば、18世紀のどの時期であったとしても受け容れられていたであろうということであり、いずれにしても一部の同時代人やその後のヘンデル礼讃者たちが想像するほどそのことは独創的ではなかったということである。

ヘンデルとその台本作家たちが宗教的崇高さの領域にもたらした最大の芸術的革新は、音楽史家サー・ジョン・ホーキンスが記したように、歌詞と音楽とに（ダヴェナントが提唱した類の）物語としての一貫性を与えたことであった——

「というのも彼は常に言っていたのである。イングランドの聴衆にとっては、詩と結びついた音楽は夕べの余興などではなく、聴衆の注目を維持し続けるためには、筋立てや構想のごときものを持っていなければならない、と」⁽²²⁾。しかし、ヘンデルの同時代人による論評において、賞讃の的であったのは筋立てではなかった。賞讃はもっぱらヘンデルが宗教的崇高さに通暁していることに注がれた。イングランドでの経歴の初期において、再三再四にわたって同時代人がヘンデルのことを誉め讃えたのは、音楽が秘めている十全たる感覚的、宗教的、道徳的な力を引き出すことのできる作曲家——唯一無二の作曲家——としてだったのである。アーロン・ヒルは改革者たちが掲げた目標を実現することのできる芸術家としてヘンデルをとらえている——

ああ！ 汝の通行証を国家の祈りのために用いよ。

宗教の気だるい炎は一度も

これほど弱々しく燃えたことはなかった。もう決して求めるな、

そのような名高き賑やかなしの保護の力を、

汝の力は頑迷な心をねじ伏せて感じさせ、

生ぬるい疑惑者を掻き立てて熱心へと向かわせう。⁽²³⁾

ヘンデルは人間の感情を掻き立てかつ制御するある楽器奏者についての頌歌〔訳注2〕を制作しているが、すでにその14年も前、ヘンデル自身もそのような人物として書き立てられていた——

汝は我々の精神を支配する——

義しい度合いで高下する精神を。

諸々の魂は汝の手腕に媚びへつらう。⁽²⁴⁾

その生涯を通じて、ヘンデルを賞讃した印刷物が認めているのは、量感においても規模においても勢いにおいても空前の力強さを具えた作品によって、演奏家としても作曲家としても、聞く者の情感を刺激し操る才能を有しているという点であった。辛辣家のロード・ハーヴィーは決して熱心なヘンデル支持者だったわ

けではないが、その彼でさえ「誰よりも音楽に関して分別、手腕、判断力、表現力を持っている」⁽²⁵⁾と評したほどである。ヘンデルは、イングランドの聴衆に対してオラトリオを作曲し始める遥か以前から、聴く者に天上の至福を味わわせるときにこそ最も感動を与える、崇高な音楽の巨匠と見なされていたのである。彼のオラトリオは、様々に異なる性格の聴衆によって、宗教的崇高をそれ以前にはなかった比類なきかたちで表現したものとして、迎えられたのである。それによって聴衆は宗教的情熱に満たされた。そしてこれは、彼らが切望していたものであり、彼らを向上させるものだったのである。

[《ヨシュア》の] 歌詞は私が望みえたほどに音楽に相応しい優雅さもなく、よく出来たものでもなかったけれども、私は最も神聖な恍惚状態に落ちたのです。——私は瞼を閉じ、自分が永遠の日の輝かしい領域において天使たちの合唱隊の只中にいて、我が偉大なる創造主と、その神聖この上ないメシアへの讃美を詠唱しているところを夢想しました。私には思えました——自分にはこの世的なものが一切まとわりついておらず、ただ魂だけの存在であると。霊そのものの存在であると！

私は以下の思いを禁じ得ません。この種の催しが頻繁に行われたならば、最も頑迷な心の持ち主たちをも感化し、大いに時代を矯正する働きを為すでしょう。時代は神に対する不敬の時代へと、同時に、互いに対する言動の残忍性に満ちた時代へと退化しつつあるように思われます。しかし、このような趣味の墮落、道義や礼儀の墮落が、ロンドンからこの島の最果ての地方にまで広がったように、オラトリオが王国全土のあらゆる地方都市や大きな町々において定着したことを喜ばなくてはならないでしょう。それでもしかし、広く一般の役に立てるためには、オラトリオは無料で供され、あらゆる種類の人々がこれに参加することを許されなければなりません。⁽²⁶⁾

エリザ・ヘイウッドのこの文章は、さる主教に宛てた貴婦人の手紙という体裁で書かれているのであるが、熱を帯びた彼女の反応は女性だからというわけではない。ヘンデルの「雄々しい」聴衆が同様の感情を示した例をいくらでも引用でき

る。例えば劇場支配人のベンジャミン・ヴィクターなどは、ヘンデルの指揮による《メサイア》の演奏会に出席するためなら風雨の中を40マイルも馬車に乗って行くことも厭わないと言明し、手紙の相手に強く勧めていわく、

何日か前にオラトリオの本〔台本〕を入手しなさい。その主題についてよく咀嚼しておくことができるように。そうすればキリストの降誕の箇所では喜ばしい知らせと真に神聖な喜びを聞き、受難に対して本当の悲しみを感じるでしょう——そして、受難の場面が終われば、ああ、何という恍惚感を与える全体合唱！ そこでは全ての楽器と3組に分かれた歌声が全力で次の歌詞——引用せずにはおられません——を歌い上げるのです。

こうべ
頭を上げよ、ああ汝ら城門よ！ 上がれ、ああ汝ら

永遠の扉よ。栄光の王が入って来られる。

栄光の王とは誰か？ 強大なる主、

彼こそ栄光の王である！

そして、彼は永遠に支配し給う。王のなかの王、主のなかの主。

東方の著者たちの言葉遣いは何と真正に詩的であることか……ああ、全
声部合唱の何と荘厳であることか！⁽²⁷⁾

劇あるいは語りとしてのオラトリオの構造については、現存する同時代の論評から多くを引き出すことはできないが、歌詞そのものが、特に聖書から直接採られた歌詞が、崇高な効果を生み出す上で決定的に重要であったと考えられる。1739年4月の『ロンドン・デイリー・ポスト』紙上で《エジプトのイスラエル》を賞讃する記事を書いた者も、ヴィクターと同様、上演会場に台本を携えて行くことを強く勧めている——「というのも、音楽そのものが得も言われぬほど素晴らしいのだけれど、その音楽がどのような歌詞に曲付けされているかが見えると、その素晴らしさは測り知れぬほど増大するからである。特に台本を携帯できた者は皆、音に耳を傾けるのと同時に意味に心を傾ける上で、最善を尽くす方法を持つことになる」。しかし、歌詞に音楽が相応しいという主題を熱く語りつつ、この投稿者は、演奏中に台本を目で追うだけでは不十分であり、前もって入念に読ん

でおかねばならないと感じている——「もし人々が、実際に聞きに行く前に静かにわずかな時間を費やし、この神聖な劇の歌詞を自分で読んでおくだけで、演奏会の席での喜びが著しく増すことにつながるであろう」。この書き手は噂を耳にしていた。

歌詞は聖なる書物から偉大なる作曲家本人によって選ばれたものです。そうだとするならば、この点に関する彼の選択眼の確かさは、また彼が主題の壮大さに対して、かくも高貴に、かくも荘厳なる音を、かくも見事に適合させた手腕は、彼の天賦の才が——⁽²⁸⁾勧められさえすれば——彼をどのような道に向かわせるかを示しています。

* * *

ヘンデルのオラトリオには、そのための地ならしがあらかじめ整っていた。これまで見てきたような、道徳心を向上させ霊想を高揚させる宗教的な芸術を希求する声、聖書に基づいた劇を望む声、自国の、国民的かつプロテスタント的な歌詞付きの音楽作品を求める声、劇的作品における教導的に歌う合唱の復活を待望する声に、オラトリオは応えたのであった。これらはすべて、感動的でなくてはならず、また^{アレゴリカル}寓意的になる可能性を持つものであった。これらは18世紀においていくつかの役割を担っていた旧約聖書への強烈な関心の上に立脚するものであった。すなわち、自由思想に対して自らを擁護しなければならなかったキリスト教の拠所としての旧約聖書、崇高な文章の比類なき宝庫・出典としての旧約聖書、我々の最良の音楽の起源を記した書としての旧約聖書、そして（これは本書第2部の主題となるが）英国の歴史の写し絵としての旧約聖書である。歴史を描くことは絵画における最も高貴なたちであった。叙事詩は最高の文学形式であった。旧約聖書は崇高な表現の最大の宝庫であった。宗教的音楽は音楽の極致であった。そして、大規模な宗教的合唱曲を締めくくる「壮大な合唱」は「人間の本性が受けとめうる最も高貴な作品」⁽²⁹⁾であった。これらの要素をすべて兼ね備えたオラトリオが、出現の時を迎えようとしていた。

（以下、次回へ続く）

注

- (1) Patrick Collinson, *The Birthpangs of Protestant England: Religious and Cultural Change in the Sixteenth and Seventeenth Centuries* (1988, repr. 1991), pp. 95-6.
- (2) John Blow, *Amphion Anglicus* (1700).
- (3) Humphrey Wanley, 'Of the Age of MSS. Authors, Painters, Musicians, etc' in *The Philosophical Transactions (From the Year 1700 to the Year 1720) Abridg'd and Dispos'd under General Heads* (1749), V.ii.9, cited in John Hollander, *The Untuning of the Sky* (New York 1961, repr. 1970), p. 256 no. 28.
- (4) Matthew Prior, *Poems on Several Occasions . . . to which is Prefixed the Life of Mr Prior, by Samuel Humphreys, esq.* (3/1733), I, 6, ll. 29-35.
- (5) Arthur Bedford, *The Excellency of Divine Musick: or a Sermon Preach'd in the Parish-Church of St Michael's Crooked Lane, in the City of London, on Thursday the Fourth Day of October, and at Sir George Wheeler's Chapel, on Monday the Fifth of November . . . 1733. Before Several Members of Such Societies who are Lovers of Psalmody. To which is Added, a Specimen of Easy, Grave Tunes, instead of those which are Used in our Profane and Wanton Ballads* (n.d.). 以下において、ベッドフォードは1736年に創刊された詩篇と聖歌と祝歌の季刊誌 *Divine Recreations* の推進者であったと推測されている。Nicholas Temperley, *The Music of the English Parish Church* (Cambridge, 1979), I, 126-7. 18世紀前半における「ロンドンの音楽文化の中での宗教音楽の隆盛」については以下を参照されたい。A.H.Shapiro, "Drama of an Infinitely Superior Nature": Handel's Early English Oratorios and the Religious Sublime', *M & L* 74 (1993), 215-45, at pp. 216-21, 224-7.
- (6) 宗教的な愛好家団体が行なったものも含む声楽宗教曲（詩篇、聖歌、^{アンセム}頌歌）の出版の具体例については、Temperley, *Music of the English Parish Church*, I, 126-7, 134, 142, 144, 146を参照されたい。
- (7) Joseph Addison, *Spectator* no. 405 (14 June 1712), ed. Donald F. Bond (Oxford, 1965), III, 514-16.
- (8) Bruce Wood, 'Cavendish Weedon: Impresario Extraordinary', *The Consort* 33 (1977), 222-4における上演年の誤りはShapiro, 'Drama', p. 220において訂正されている。Shapiroも

また、ウィードンが打ち出した新機軸を文化改良という文脈の中に位置づけている。小冊子に関する記述、テイトの詩における聖セシリアへの言及についての記載、およびウィードンの社会改良の狙いを慈善目的にあとから付け足されたものと見ている点において、Woodは誤りを犯している。

- (9) Wood, 'Cavendish Weedon', p. 222.
- (10) *The Post Man*, 13-16 December 1701; *The London Gazette*, 14-18 May 1702. 以下も参照されたい。 *The Post Boy*, 25-7 December 1701, 1-3 January 1701/2; *The Post Angel*, March 1701/2; *The London Gazette*, 12-16 February 1701/2, 19-23 February 1701/2, 30April-4May 1702; *The Post Boy*, 5-7 May 1702.
- (11) *The Post Man*, 13-16 December 1701.
- (12) *The Post Boy*, 25-7 December 1701.
- (13) *The Post Boy*, 25-7 December 1701, 1-3 January 1701/2.
- (14) *The Post Man*, 13-16 December 1701. 18世紀初期におけるその他の慈善を目的とした音楽の催しについては、Shapiro, 'Drama', pp. 219-20を参照されたい。《メサイア》の観客に対する、佩刀およびフープスカート着用はご遠慮願いたし、との有名な呼びかけについては、Deutsch p. 545を参照。
- (15) *The Oration and Poem at Mr Weedon's Entertainment of Divine Musick . . . Perform'd at Stationers-Hall, on Tuesday the 6th of Jan. 1702 (1702); Oration, Anthems and Poems, Spoken and Sung at the Performance of Divine Musick. For the Entertainment of the Lords Spiritual and Temporal and the honourable House of Commons at Stationers-Hall, January the 31st 1701 [old style] Undertaken by Cavendish Weedon Esq (1602 [recte 1702]); The Oration, Anthems and Poems, Spoken and Sung at the Performance of Divine Musick, at Stationers-Hall, for the Month of May, 1702, Undertaken by Cavendish Weedon, Esq. (1702).*
- (16) James R. Jacob and Timothy Raylor, 'Opera and Obedience: Thomas Hobbes and *A Proposition for Advancement of Morallitie* by Sir William Davenant', *The Seventeenth Century* 6 (1991), 205-50, at pp. 205, 208, 209, 211, 213-4, 226, 231-2, 243, 245-6. (この文献を紹介できたのはJeremy Mauleのおかげである。)
- (17) Shapiro, 'Drama', p. 216.
- (18) ヘンデル自身にとっては、宗教的な環境と世俗的な環境の境界線上でオラトリオを演奏す

- ることは何ら異常なことではなかった。若き日を過ごしたイタリアにおいて、貴族の宮廷の礼拝堂で上演されるオラトリオに慣れ親しんでいたからである（本書第1章を参照）。
- (19) Shapiro, 'Drama', pp. 218-9. もしかするとウィードン本人は、慈善学校で毎年開催されていて心の琴線に触れた記念祝典を中産階級向けにした世俗版を提供していたのかもしれない。そういう祝典には、特別な説教とそのため特に作曲された讃美歌や頌歌が含まれていたのである（Temperley, *Music of the English Parish Church*, I, 103-4）。
- (20) デフォーのこの提案は、*Augusta Triumphans* 中に見られる音楽アカデミー設立計画の第21、22段落に該当する。Brian Trowell, 'Daniel Defoe's Plan for an Academy of Music at Christ's Hospital, with Some Notes on his Attitude to Music', in *Source Materials and the interpretation of Music: A Memorial Volume to Thurston Dart*, ed. Ian Bent (1981), pp. 403-27, at pp. 410, 423, 426-7.
- (21) [John Mainwaring et. al.] *Memoirs of the Life of the Late George Frederic Handel* (1760), pp. 127-8.
- (22) Sir John Hawkins, *A General History of the Science and Practice of Music* (1776, repr. New York, 1963), II, 890.
- (23) Aaron Hill, 'An Ode, on the Occasion of Mr. Handel's Great Te Deum, at the Feast of the Sons of the Clergy' (1733), quoted Deutsch pp. 306-7.
- (24) Daniel Prat, *An Ode to Mr Handel*, on his Playing on the Organ (1722), quoted Deutsch pp. 139-43.
- (25) John Hervey, quoted Deutsch p. 396.
- (26) Eliza Haywood, *Epistles for the Ladies* (1749), I, 79, quoted Robert Manson Myers, *Handel's Messiah: A Touchstone of Taste* (New York, 1948), pp. 125-6.
- (27) Benjamin Victor to the Rev. William Rothery, 27 December 1752, in *Original Letters, Dramatic Pieces, and Poems* (1776), I, 189-90, quoted Deutsch p. 729.
- (28) Deutsch pp. 481-3.
- (29) John Frederick Lampe, *The Art of Musick* (1740), p. 11, quoted Shapiro, 'Drama', p. 232.

訳注

[1] 本論集では第121号（2006年12月）の145-46頁にあたる。

[2] 《アレグサンダーの饗宴、あるいは音楽の力》（1736年）を指す。

訳者付記

以上はRuth Smith, *Handel's Oratorios and Eighteenth-Century Thought* (Cambridge University Press, 1995) 第1部 'English origins of English oratorio' の第7章 "Towards oratorio" (pp. 157 - 70) と、その巻末注の部分 (pp. 391 - 93) を試訳したものである。

今回もこれまでと同じく、原著の難解な部分——とりわけ、多く引用されている18世紀の英語の文章——については、質問メールで著者をお煩わせた（スミス博士は昨年の夏にケンブリッジ大学の就職アドバイザーの職を辞し、現在は研究・執筆・講演等に専念されており、却って以前よりもご多忙なほどである）。ここであらためてお詫びするとともに、謝意を表しておきたい。それでもなお思わぬ不備はあるかもしれない。読者から忌憚のないご批判・ご指導を頂戴できたならば幸甚である。